



# 「ハンガリーに赴任して…… ハンガリーという国の歴史と現状」

郵便事業株式会社 代表取締役社長 前在ハンガリー日本国大使館特命全権大使

なべくら しんいち  
鍋倉 眞一



ただいま御紹介いただきました鍋倉でございます。昨年9月まで3年弱、ハンガリーで大使というものをやっておりました。3年間で経験したこと、ハンガリーとはこういう国ですよということを皆さん方に知っていただくのも前大使としての役割ではないかと思ひまして、今日はハンガリーのお話をさせていただきます。

私が帰りますときに、さよならの御あいさつを大統領には必ずするわけですが、それ以外にだめもとで首相と国会議長に申し込みましたら、二人とも会っていただけました。ほかの国のことをいろいろ聞いてみますと、小さな国だと大統領も会わないことがあるようです。私の場合には、三権の長とっていますが、全部の方にお会いし、御あいさつをして帰ってまいりました。

## 1. ハンガリーへの赴任

大使というのは、ある意味では非常に恵まれた職場でして、いろいろな方にお会いできるという特権がありました。赴任前には当然、信任状を陛下から頂きます。もちろんハンガリーへ行きましたら、元首である大統領に手渡しをする儀式があります。

大統領府に行きますと、儀仗兵の閲兵があります。サーベルを握った人に先導され、両側に並ぶ銃剣を持った方々の前をずっと歩いていくという、日本にいますと恐らく総理大臣か防衛大臣しか経験したことのないような儀式です。そのあと大統領にお会いして、20～30分歓談できるというセレモニーがあるわけです。

そういう儀式がありますときには当然女房も連れて行くのですが、女房が後ろから見ていて非常にハラハラしたそうです。やはり緊張していましたので、手と足が一緒に出ていて(笑)、けつまずかないだろうか、ここでけつまずいたらえらいことになるというので非常に心配したようです。そういう儀式ですので慣れませんから、確かに緊張いたしました。そういうことをやった上で3年間は始まったわけです。

日本の大使をやっていて非常に良かったという気がしております。痩せても枯れてもやはり日本は大国でありますので、ハンガリーの政府が非常に大事にしてくれたということがあります。小さな国ですから、大国を大事にするということがあるのかもしれない。

例えば、ある大臣に会いたいと思うと、すぐには会えませんが、2週間のうちには必ず会える。変な話、アメリカの日本大使はクリントンにはなかなか会えないのではないかと思います。小さな国ですからかなりフランクに会えます。それから、やはり大国だということだったのだらうと思います。

## 2. ハンガリー人の祖先はアジア人

前置きが長くなりました。ハンガリーというと、皆さん方は恐らく、ハンガリー動乱とオーストリア・ハンガリー二重帝国ぐらいしか御存じないと思います。私もそうでした。ハンガリーは1000万人の国です。面積が日本の4分の1。非常に小さな国です。ただ、ヨーロッパに行かれた方はよくお分かりだと思います。1000万人で日本の国土の4分の1というのは、何百万という国がいっぱいあるヨーロッパでは中ぐらいの国です。

ですから、アジアの大使が集まって当時のハンガリーの外務大臣を呼んだときに、外務大臣が自分の国のことを「小さな国」と言ったあとに、「ただし、ヨーロッパでは中ぐらいの国です」と言い直したのが非常に印象的でした。それはよく覚えています。そういう国です。

これも御承知だろうと思いますが、実は祖先がアジア人です。非常に親日的です。なぜこんなに親日的なのかということいろいろ勉強をしてみました。実は第一次世界大戦後にハンガリーでツラン運動という民族運動が起こります。そのときになぜだか解りませんが、日本人とハンガリー人とは同根だという説がまことしやかに唱えられたわけです。

そういうことがあるので、非常に親日的な国です。

ハンガリーの祖先は、戦前まではフン族というのが通説でした。私もハンガリーに行く前には、ハンガリーは「フンガリー」、フィンランドは「フィンランド」と言われていました。フィンランドもアジア系です。

フン族が東から西に来たときに、頭のいい人には道路標識が読めた。だから、どっちに行けばいいかということが分かったので、非常に気候のいいハンガリーに来て、ハンガリー



人になった。それから、これを言うと長谷川先生（長谷川憲正元駐フィンランド兼エストニア特命全権大使、現参議院議員）に非常に悪いのかもしれませんが（笑）、頭の悪い、字の読めなかった人は北に行き、寒いところでフィンランド人になった。これはハンガリーでよく言われておりますお話です。

ですから、フン族が祖先だろうと思っておりました。それは今でもまことしやかに多くのハンガリー人に支持されておりますが、どうも最近の歴史では通説が違って来たようで、フン族ではないという説が通説のようです。

もし仮にフン族が祖先だとすると、フン族をもっとさかのぼりますと匈奴になりますので、中国を攻めた匈奴が祖先ということになります。ですから、全くアジア人ということになるのだらうと思います。中国ではハンガリーを漢字で「匈牙利」と書きます。意味があるのは「匈」です。つまり中国人は、ハンガリー人の祖先が匈奴だと思っていて、だから「匈」という字をハンガリーという国に当てています。本当かどうかはよく分かりませんが、そういう説がまことしやかにずっとあります。そういうアジア人です。

### 3. お辞儀の仕方が非常に日本的

ですから、先ほどお話しをしておりましたときにどなたか言われていたのですが、今でも100人のうち3人か4人は蒙古斑が出ます。要するにスラブ系なのかルーマニアなのかよく分からないような顔をしておりますが、いまでも蒙古斑が出ます。それから、行かれた方はよくお分かりになると思いますが、お辞儀の仕方が非常に日本的です。それも本当に自然に日本のお辞儀をする国です。ですから、感情がよく似ております。

それから、私はハンガリー語は全く分かりませんが、ハンガリー語の文法は日本語とそんなに変わりはありません。また人名も、名、姓ではなく姓、名の順です。いろいろな面でハンガリーはアジア的なところのある民族です。

### 4. ノーベル賞受賞者数は世界一

そういう国に赴任していろいろなことがありますが、ハンガリーというのはすごい国だなと思いました。実は日本よりもハンガリーの方が世界的に有名な方がいっぱいいます。例えばインテルの共同創設者のアンディ・グロブ、コンピュータの創始者のノイマン、最近ではジョージ・ソロスがそ

うです。昔であれば、皆さん御存じだろうと思いますが、音楽ではリスト、バルトーク、コダーイがいます。日本人の13分の1の国ですが、世界的に有名になった人間は日本よりもたくさんおります。

しかも、ノーベル賞の受賞者数は人口比で世界一。非常に頭のいい国です。特に皆様方の御専門のIT、それにバイオ、環境の三つの技術では、非常に広い技術ではありませんが、狭い範囲ではものすごく深い技術をいっぱい持っています。ですから、ブダペスト工科大学は、世界的なIT産業のマイクロソフト、インテルなどいろいろな企業と共同の研究所を持っているか、あるいは共同研究をしています。唯一していないのが日本です。それぐらい非常に頭のいい国です。

もう一つ言わせていただきますと、多少お笑いのようですが、ルービックキューブというのがあります。あれを発明というか、最初に考えたのがハンガリー人です。今まだ生きています。あるいはボールペンの原理を最初に考えたのがハンガリー人です。ビタミンCを発見したのもハンガリー人です。名前は忘れましたが、そういう具合にハンガリーは、世界的にも有名になった製品とか、世界的なもの非常多にある国です。

### 5. 虐げられた歴史の連続

政治的には非常に変化の激しいところです。今、社会党政権ですが、4年に一度選挙があるものの同じ政権が2期続いたのは今回が初めてです。体制転換後はいつも右派と左派が代りばんこに政権を担っていたというような国です。

フン族の話をしましたけれども、非常にかわいそうな民族です。実はずっと虐げられた歴史をたどっております。紀元1000年に建国し、200年か300年ぐらいいい良かった。ところが、13世紀の初めに蒙古が攻めてきて、モンゴルにしこたまやられてしまいます。たまたまそのときに大ハーンが亡くなり、大ハーン選挙があるということで蒙古軍が本国の方に帰ってしまったので助かったのですが、まず蒙古にやられる。

それから、16世紀にはトルコにやられ、1世紀半ぐらいいいトルコの支配を受けます。それが去ったと思ったらハプスブルクがやってきます。ハプスブルクの王家とチャンチャンバラバラがいろいろあって、最終的に妥協が成立し、1867年にオーストリア・ハンガリー帝国という二重帝国ができます。

これは何かと言うと、ハンガリーという国はありますと、国は残ったわけです。ただし君主はオーストリアの皇帝が兼



ねます。要するにオーストリア皇帝がハンガリー国王の王冠をかぶる戴冠式をやって、この君主が皇帝でありハンガリーの国王になった。そういう妥協です。ただし、外務大臣だとか外交や軍事は一つで、それ以外は二つに分かれていました。変てこな形ですけども、そういう妥協が成立してオーストリア・ハンガリー二重帝国ができ、ずっとハブスブルクに支配をされました。

その後、第一次世界大戦で負け、第二次世界大戦にも負けます。第二次世界大戦の間にはナチに攻められ、ハンガリーにはユダヤ系がいっぱいおられますので、ハンガリーのユダヤ系の人々が20万人ぐらいアウシュビッツに連れて行かれています。そしてほとんどが命を失っている。

そういうナチの支配を受けて、やっとナチがいなくなって解放されたのかと思ったら、ソ連がやってきてソ連の支配が始まる。そういう国です。ソ連の時代にはやはり虐げられた生活をしておりました。それがどんなものか、皆さん想像ができますと思います。そのときハンガリーで一番偉かったのが在ハンガリーのソ連大使です。大使館にハンガリーの各大臣などを呼びつけて叱り飛ばし、命令をしていた。そういうソ連の支配を受けます。それがたまらないということで、1956年にハンガリー動乱が起こるわけです。

ハンガリー動乱と言いますが、彼らは当然、ハンガリー動乱とは言いません。ハンガリー革命です。何に対する革命かということ、社会主義に対する革命です。それを1956年に起こし、ものの見事に失敗をする。あとき死傷者が確か2万人いるはず。そのときにソ連の戦車に乗って入ってきたのが、その後30年近くハンガリーを支配したカダールという第一書記です。ソ連の戦車に乗ってやってきたということです。

その当時の首相であったナジ・イムレという方はソ連に捕まり、2年後には処刑をされてしまう。1956年に革命が失敗し、そのあとはずっとソ連の支配を受けて、1989年、20年前にやっと解放されるわけです。

## 6. 自由主義を加味した社会主義の国

私も行って驚いたのですが、ぜひ皆さんの記憶にとどめておいていただきたいのは、ベルリンの壁崩壊の原因を作ったのはハンガリーです。これはヨーロッパではかなり有名な話なのですが、日本人はほとんど知りません。

実はハンガリーという国は、社会主義から何とか逃れたいという気持ちで、ソ連が支配している時代からずっとありま

した。ハンガリーという国はずっと顔は西を向いていました。そういう国でしたので、ハンガリーの社会主義は普通の社会主義と違って、ある程度の自由とある程度の市場主義を入れておりました。

少し話がそれますが、中国が鄧小平の改革・開放をやり始めたときに、社会主義の中で、市場の原理の導入だとか、あるいはある程度の自由だとか、そういうものを行っている国はどこかないだろうかとお手本を探していて、実は見つけたのがハンガリーです。ですから、ハンガリーの人たちは当時多くの人々が中国に行って、ハンガリーの社会主義というものを教えておられます。私も中国語がペラペラというハンガリーの役人に何度かお会いしました。そういう非常に自由主義を加味した社会主義であったということです。

1989年のあたり、ソ連はゴルバチョフでそろそろタガが緩んできたときにどういうことが起こったかということ、西ドイツに行きたいという東ドイツの人間が当時のチェコスロバキアを通してハンガリーに行き、ハンガリーとオーストリアとの国境でたむろしたわけです。「もうすぐ国境が開くかもしれない。開けば、オーストリアを経由して西ドイツに逃げられる」。当時、ハンガリーではそういうふうなことをやりそうだという雰囲気があって、東ドイツの人間が大挙してハンガリーに来ていました。

どうしたかということ、これは汎ヨーロッパ・ピクニックと言うのですが、ピクニックをするという口実で国境に集まった人に国境を開いてしまっただけで、集まっていた人間が全部、西ドイツに抜けます。それを聞いた東ヨーロッパの人間が、今度は何万人とハンガリーに押し寄せてきた。その人たちのために今度は永久に国境を開くことになったのです。

要するに何が言いたいかということ、ベルリンの壁の価値がなくなってしまったということです。ベルリンの壁があるがなかろうが、迂回をすれば東ドイツから西ドイツに行ける。そういう道ができてしまった。もうそれから半年もしないうちにベルリンの壁は崩れました。国境を開こうと英断をしたハンガリーの首相は当時、40歳のネーメトという人です。まだ20年しか経っていませんから、当然まだ存命です。非常に大英断をして国境を開いたわけです。

ですから、ハンガリー人というのは、ハンガリー動乱をやってみたり、国境を開いてみたり、あるいはハブスブルクに刃向かってみたり、ふだんはおとなしい人々ですけども、いざというときにとんでもないようなことをやる民族だと思います。冒頭御紹介しましたように、頭のいい民族でいろいろな技術を持っている。しかも、体制転換後は東欧の優等生と



言われた国です。最近でこそ経済の状態が悪く、東欧のほかの国に抜かれそうになっておりますが、もともとそういう国です。皆さん方も是非行かれて、できればそこにジョイントベンチャーでも作っていただけると、いろいろなことができるのではないかと思います。

体制転換後には日本からスズキ自動車が行っております。自動車関連の産業はいっぱいあります。ソニーも行っていますし、サンヨーも行っています。いろいろな国が行っている。ただ残念ながら、それこそIT関係の方はまだまだ来ておりません。ところが、ソフトバンクにおられたベンチャーのキャピタルをやっている北尾さんという方は、それこそハンガリー

のベンチャーに投資をするということで、一昨年の12月にハンガリーにファンドを作りました。そういう国ですから、いろいろなビジネスチャンスもあると思いますし、冒頭申しましたように親日的な国ですので、是非行かれてビジネスのチャンスでも見つけていただければありがたいと思います。

雑談ばかりになりましたけれども、時間もまいったようですので、お話を終わらせていただきたいと思います。ありがとうございました。(拍手)

(2010年1月19日第380回ITUクラブ講演会より)



ITUクラブでの筆者講演風景